希望の道標

vol.3

取材・文／広重隆樹
撮影／富永智子

市民としての教養そして賢慮を若い人たちは身につけてゆくはず

村上陽一郎 *Yoichiro Murakami* 科学史家・科学哲学者

むらかみ・よういちろう●1936年東京都生まれ。東京大学教養学部卒業、同大学院人文科学研究科博士課程修了。東京大学先端科学技術研究センター長、国際基督教大学大学院教授などを経て、現在は東京理科大学大学院科学教育研究科科長、東京大学科学技術インタープリター養成プログラム特任教授。人間の心や日常生活を切断することなく科学を支える思想を考察、隣接諸領域を含む問題提起を続ける。主な著書に『近代科学を超えて』『近代科学と聖俗革命』『生と死への眼差し』『文明のなかの科学』『ヒューマンサイエンス全5巻』（共編 毎日出版文化賞受賞）など。近年は『安全と安心の科学』などの著書を通して、安全学を提唱している。

生まれてから死ぬまで、人は医療と無縁でいることはできません。いや、今は人工授精や着床前診断という技術があるし、死後の臓器移植もありますから、こうした医学や医療技術の成果に、人間は誕生以前から死後に至るまで「支配」されつづけていると言っても言いすぎではないのです。

こうした状況は、ここ数十年の間に急速に広がったものです。それほど生命科学をはじめとする科学技術の発展は急速なのですが、社会がそれに追いついていっているかといえば、はなはだ心許ないところがあります。社会の法制度、教育制度、倫理観などもまた対応は遅れがちです。

■

医療に限った話ではありません。日本は昭和30年代から原子力平和利用の技術を磨き、いまや電力供給の約40%を原子力に依存する国です。しかしそれにもかかわらず、相変わらず人々は原子力技術に対する一抹の不安をぬぐえないでいます。その一つの理由は、自分たちの知らないところで、行政や産業が専門家と結び、物事を決め、自分たちは結果だけを押しつけられていると考えているからではないでしょうか。

そうした危惧を背景に、「パブリック・インボルブメント（市民参加）」的な考え方も生まれてきました。“お上”や行政や大企業が下した結論を、市民が受け身的に受け入れるのではなく、最初の計画段階から意志決定プロセスに参加すべきだというものです。

しかしその場合に不可欠なのは、市民の側の科学知識についての素養です。また、裁判員制度と同様に、意志決定における市民一人ひとりの責任も覚悟しなければならなくなります。

このように、科学技術の成果が文字通り一人ひとりの生活を支配するような力をもつ時代には、同時に、科学技術の専門家もまた自分の狭い枠に閉じこもることなく、幅広い知識や教養を身につける必要があります。

ときには、村の古老のような立場の人がもつ、長年にわたって培われてきた経験や知恵に耳を傾ける必要もあるでしょう。これらは「賢慮」、英語で言えば、prudence と呼ばれるものです。私は、こうした賢慮や常識をも包含する形で、科学技術についての教養が再定義されるべきだと考えています。

■

さて、そうした教養をどこでどのように身につけるべきかという話です。いま大学は、教養を養う場としては必ずしも楽観視できる状況にはありません。とりわけ文系学部の学生については悲観的です。教養課程がうまく機能していないということもあり、文系学生のほとんどが、科学や技術についての基礎知識を学ぶ機会を得ないままに社会に出ていく現状があります。科学技術の成果が文字通り一人ひとりの生活を支配する社会で、これがどれほど奇妙なことであるのか。そのことをぜひ考えていただきたいと思います。

インターネットの時代には、教養の形成の仕方が変わってくるという人もいます。悪い方向への変化という点では私も同意します。新聞を読まず、ウィキペディアからのコピー&ペーストだけでレポートを書く学生はたしかに多い。かつて書物の出版という形で担保されていた、教養の権威性が揺らいでいることもたしかでしょう。

■

ただ、インターネットは悪いことばかりではない。アメリカに、エイズ問題に関わる「アクトアップ」という組織があります。当初は治験前の治療薬を無料配布するなど過激な行動で知られていましたが、そのうち非常によく勉強するようになった。いまやその知識は、並みの臨床医や研究者をしのぐほどで、その活動はエイズ治療薬の方向性を変える役割も果たしました。

彼らが知識を集約する上で、インターネットは大いに役立ったと言われています。ネット上の玉石混淆の膨大な知識をフィルタリングして、自分たちの力にしていったのです。いわば「非専門の専門家」が生まれた瞬間です。彼らが身につけた教養とは現代社会における生きる力そのものです。

若い人たちが科学技術に興味をもつ最初のきっかけは、だからWebサイトの情報でもいい。そこから好奇心を積み上げ、そこで得た知識を自分にとっての切実な課題と切り結び、いわば実践的な総合的学習を広げていく。その繰り返しのなかから、新しい時代における科学技術の知識、賢慮を含む新しい教養が生まれることに、私は希望をつないでいきたいと思います。